



TITLE:

乳児両側性陰嚢乳糜腫の1例

AUTHOR(S):

寺地, 敏郎; 滝, 洋二; 町田, 修三

CITATION:

寺地, 敏郎 ...[et al]. 乳児両側性陰嚢乳糜腫の1例. 泌尿器科紀要 1980, 26(9): 1149-1152

ISSUE DATE:

1980-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/122725>

RIGHT:

乳児両側性陰嚢乳糜腫の1例

倉敷中央病院泌尿器科（部長：町田修三）

寺 地 敏 郎
滝 洋 二
町 田 修 三

A CASE OF BILATERAL CHYLOCELE IN INFANT

Toshiro TERACHI, Yoji TAKI and Shuzo MACHIDA

*From the Department of Urology Kurashiki Central Hospital, Kurashiki
(Chief: S. Machida)*

A two-month-old boy with scrotums enlarged bilaterally, was referred from the pediatric department because milk-like fluid was aspirated from the right scrotum.

Lipograph of the fluid showed it to be chyle. Left scrotal contents had no transillumination. The patient presented no other symptoms suggesting filariasis. Diagnosis was made as bilateral non-parasitic chylocele in infant.

Only one case of chylocele in infant was reported at present, but it was a unilateral case. The patient achieved spontaneous cure after several aspirations of the bilateral scrotums.

結 言

陰嚢乳糜腫は、本邦では現在までに12例が報告されている¹⁻¹²⁾。そのほとんどがフィラリア症の1部分症状として発症しており、両側性のものは1例⁷⁾をとるのみである。また、乳児症例としては、1969年友吉らが報告した1例¹²⁾をみる。われわれは、乳児両側性陰嚢乳糜腫の1例を経験したので報告する。

症 例

症例：Y. K. 2カ月男児

初診：1979年9月22日

主訴：両側陰嚢内容の腫大

家族歴：特記すべきことなし。両親とも生下時より倉敷に在住し、九州以南に長期滞在の経験なし。

現病歴：患児は満期正常分娩であったが、1カ月健診にて両側陰嚢内容の腫大を指摘され、生後2カ月で倉敷中央病院小児科受診。両側陰嚢水腫を疑われ、右陰嚢の穿刺を受け、約10 mlの白色乳汁様液体を吸引したため、直ちに同院泌尿器科を紹介された。

理学的所見：弾性硬に緊満し、透光性にかけるみだの左陰嚢の腫大と、腹圧にて緊満する右陰嚢の軽度腫大のみで、他の身体所見および発育には異常を認め

なかった。尿は淡黄色透明であった。

検査所見：持参した穿刺液は白色乳汁様で2,000回転5分間の遠沈にて分離せず、ヘマコンビステックスにて蛋白(卅)、糖(卅)であった。ズダンIII染色にて多数の脂肪球を認めた。フィラリア仔虫は証明されなかった。当院の脂質定量では、TG 4,800 mg/dl, T. chol. 272 mg/dl, リン脂質 581 mg/dl, 遊離脂肪酸 2.36 mg/dl, β -リポ蛋白 2.0 mg/dl であり、リポグラフでは Fig. 4 のごとくであった。

以上の所見から、陰嚢乳糜腫と診断した。

胸腹部単純撮影 (Fig. 3) では、胸腹水の貯留、後腹膜腫瘍の存在は認めず、CT スキャンにても、縦隔から骨盤腔内に至るまで、異常所見は認めなかった。

経 過

右陰嚢穿刺後、1カ月半を経過しても、右陰嚢内容の腫大は増強せず、陰嚢内に限局した乳糜腫との判断から、初診時と大きさに変化のない左陰嚢の穿刺を試みたが、右陰嚢穿刺液と同様の白色乳汁様液体を約10 ml 吸引した。その後1カ月半にて、両側陰嚢内容の透光性をもつ腫大を軽度認めたが、左側穿刺後2カ月にて、両側とも腫大は消失し、以後その腫大をみない

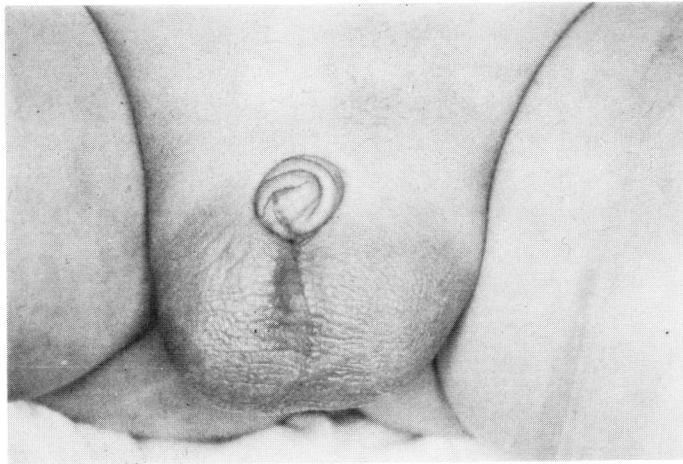


Fig. 1. 初診時

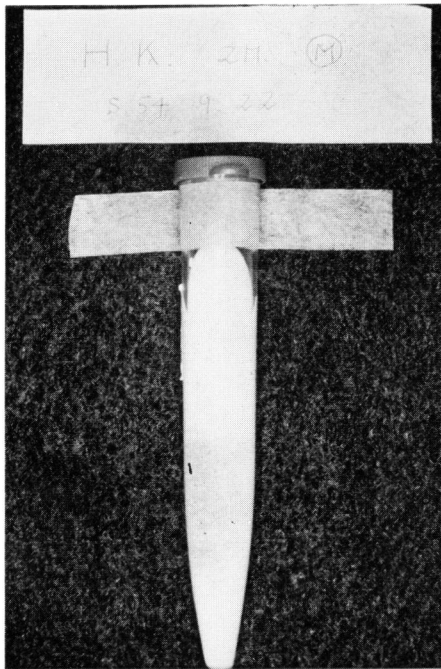


Fig. 2. 右陰囊穿刺液

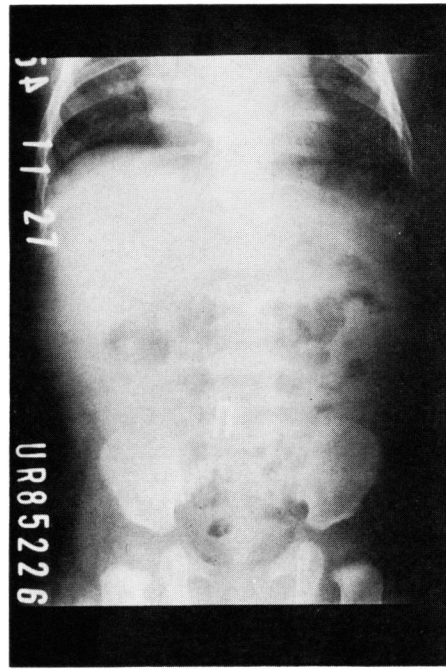


Fig. 3. 胸腹部単純写真

考 察

陰囊乳糜腫の本邦報告例を集計すると、Table 1のごとく、自験例を含めて13例である。そのうち9例にフィラリア仔虫を証明するが^{1-3, 6-11)}、すべて成人例であり、2例の乳児症例では、いずれもフィラリア感染は考えがたい。また、フィラリア仔虫の証明に関する記載のない2症例のうち1例は、鹿児島県の症例⁴⁾で、フィラリア症が疑われる。

さらに、乳児症例以外は、その発症年齢が22歳から32歳までの非常に狭い範囲に限られている¹⁻¹¹⁾。

以上のことから、ここでは、フィラリア症に合併すると思われる青壮年層の陰囊乳糜腫を除外し、フィラリア症に因を求めがたい。乳児陰囊乳糜腫につき、考察を加えてみたい。

われわれが経験した症例の乳糜液の脂質構成は、Fig. 4のごとくで、腸管膜乳糜管内の chylomicron のそれに類似し、陰囊乳糜腫の発症原因としては、友

Table 1. 陰囊乳糜腫の本邦報告例

報 告 者	患者 年齢	患側	穿 刺 液	手術	備 考
1 大森 (1933)	29	左	黄色乳様	(-)	フィラリア(+)
2 伊藤 (1935)	25	右	20 ml	(-)	フィラリア(+)
3 陳 (1939)	31	左	乳 汁 様 15 ml	(+)	フィラリア(+)
4 小林 (1942)	32	左	黄 褐 色 230 ml	(-)	鹿児島県
5 北河 (1942)	32	右	黄 色 20 ml	(+)	
6 中村市村 (1953)	27	右	乳 汁 様 10 ml	(+)	フィラリア(+)
7 森安 (1955)	56	両	乳 汁 様	(+)	フィラリア(+) 右：30年来 左：3年来
8 山村開田 (1957)	22	右			フィラリア(+)
9 近藤ほか (1957)	30				フィラリア(+)
10 岸本松本 (1959)	23	左	黄 色 30 ml	(+)	フィラリア(+)
11 篠田 (1968)	22	左	乳 汁 様 97.5 ml	(+)	フィラリア(+)
12 友吉 (1969)	1 M.	右	乳 汁 様 20 ml	(-)	フィラリア(-) 滋賀県
13 自験例	2 M.	両	乳 汁 様 左 10 ml 右 10 ml	(-)	フィラリア(-) 岡山県

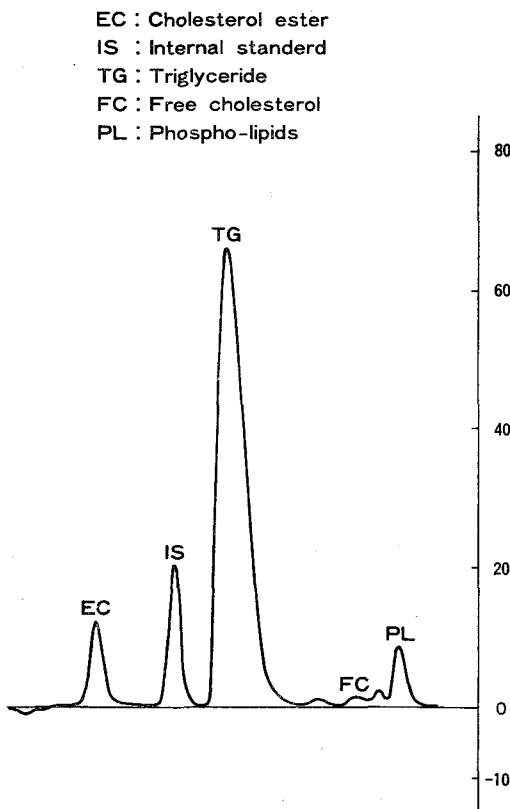


Fig. 4. 右陰囊穿刺液の脂質構成

吉らの指摘するように¹²⁾,

1. 腸管膜乳糜管から固有鞘膜へのリンパ管の異常交通

2. 異所性腸管膜乳糜管腫の固有鞘膜での発生

3. chylothorax, chyloperitoneum の1部分症状が考えられる。しかし、その発生が両側性であることから、2は考えにくいし、正常な発育を示し、胸腹部単純撮影で異常を認めないことから、3も考えられない。

精巣精索のリンパ管は、副睾丸尾部のものを除いて、直接腰リンパ節に流入し、しかるのち、乳糜槽に至るわけであるが¹³⁾,

a) 乳糜液の貯留が、両側陰囊内に限局し、胸腹部、下肢に異常所見を認めない。

b) 両側とも一回の穿刺ののち、再度腫張をみるも自然退縮した。

以上の2点から、この症例では、外傷、感染、腫瘍などによる二次性リンパ管症と呼ばれるものは考えにくい。

友吉らの症例においても、数回の穿刺ののち、腫張の自然退縮をみ¹²⁾、われわれの症例でも、1回の穿刺ののち腫張の退縮をみていることから、乳児陰囊乳糜腫は、先天的もしくは特発的な腸管膜乳糜管から固有鞘膜腔への異常交通があり、それが自然に閉鎖したと考えるのが最も妥当と考えられる。

治療法としては、まず他の全身状態、発育に異常が

ないことを確認し, chyrothorax, chyroperitoneum の合併, 二次性リンパ管症との鑑別が第1と考える. 陰嚢内に限局した乳糜腫であれば, 現在までに報告されている2例とも自然消退をみていることから, 外来における経過観察で充分と思われる. 透光性には乏しいが, 理学的所見のみでの陰嚢水腫との鑑別には困難が伴い, 乳児陰嚢水腫に準じた治療が適当であると考えらる.

結 語

1. 生後2ヵ月男児の両側陰嚢乳糜腫の1例を報告した.
2. 陰嚢乳糜腫は, 本邦では過去に12例をみるが, 乳児症例としては本症例が2例目であり, 乳児の両側性のものとしては過去に報告をみない.
3. 原因としては, 腸管膜乳糜管と固有鞘膜腔の先天性もしくは特発性の異常交通が最も考えられる.
4. 治療は, 陰嚢水腫に準じればよいと考える.

本論文の要旨は, 1979年12月, 大阪市で開催された第89回関西地方会で発表した.

参 考 文 献

- 1) 大森清一: 日泌尿会誌, **23**: 594, 1934. (抄)
- 2) 伊藤秀隆: 日泌尿会誌, **24**: 823, 1935. (抄)
- 3) 陳 以文: 日泌尿会誌, **29**: 65, 1940. (抄)
- 4) 小林樵天: 皮紀要, **39**: 64, 1942.
- 5) 北河 清: 皮紀要, **40**: 65, 1942.
- 6) 中村家政・市村 平: 皮と泌, **15**: 241, 1953.
- 7) 森安 勇: 皮と泌, **47**: 176, 1955. (抄)
- 8) 山村左内・開田峯吉: 日泌尿会誌, **48**: 220, 1957. (抄)
- 9) 近藤 厚・ほか: 日泌尿会誌, **48**: 417, 1957. (抄)
- 10) 岸本 孝・松本恵一: 臨床皮泌, **13**: 25, 1959.
- 11) 篠田 孝: 臨泌, **22**: 785, 1968.
- 12) 友吉唯夫・ほか: 泌尿紀要, **15**: 634, 1969.
- 13) 石田 修: 脈管の造影診断, 3版, 257, 南山堂, 東京, 1976.

(1980年3月25日受付)